

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、
どのように保障しているか

①分散会

I はじめに

分散会会場には、多くの参加者が詰めかけた。会場責任者の全体会や特別報告で感じた熱い思いで、分散会に参加してほしいという挨拶を受けて、2日間の討議が行われた。

分科会基調は、討議課題をもとに提案され、協力者の代表から、この分散会で報告してよかった、この分散会に参加してよかったと思える討議になるよう、会場に協力を呼びかけた。

討議の柱を確認し、報告・討議に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—②

自分の思いを表現でき 認め合える仲間づくり
をめざして (徳島県人教)

—主な質疑と意見—

協力者 自分の思いを表現することに特別活動の中で取り組んできた。最初は意見を言えなかったAさん、Bさんに、どのような関わりをし、どのように周りの子とつないできたのか。

報告者 Aさん、Bさんはどこにでもいる子。そういう子たち、その周りの子たちを変えていくことでより良い学校、地域になると考えた。様々な場面で、少しでも自分の思いを発言できたらそれを認める。また「Aさんの思いに続いて、だれか足してくれないかな」というふうにして学級全体につなげていった。

香川 Aさん、Bさんに重なるような不登校傾向の児童がいる。家庭訪問をする中で、気づいた子どもの持ち味を発揮する場面をつくることで自信が生まれ登校できるようになった。一方で、周りの子どもとはつなげられていないという思いもある。子ども自身が見出す、子どもに任せることにはリスクもある。報告者の思いを聞かせてほしい。

報告者 長期間の集団づくりの中で培ってきたものがいかされるのだと思う。お互いに自分の持

ち味を認める雰囲気の中で、子どもたちの中から「…なら〇〇さんだね」と自然となっていく。

大阪 人権学習の中で、人権課題を「自分事」とし捉えることが難しい。何か系統立てた取組があるのか。また、地域の中ではどのように学んでいるのか。

報告者 昨年度は教員が台本の中にさまざまな人権課題を取り上げ、それに子どもたちが気づいていけるようにした。今年度は子どもたちが、自分たちの生活の捉え方を変えていくことで、自ら差別に気づき、立ち向かっていけるように自分たちの生活を見つめていった。また、地域に出て学ぶ中で、隣保館の役割を6年生が下級生に伝えたり、特別支援学校にボランティアに出かけたりしている。

徳島 人権劇を地域の人権フェスティバルで発表してもらった。子どもたちのがんばる姿に、おとなもがんばらなければと感じた。

協力者 子どもから、おとなや地域を変えていく取組になっている。

徳島 自分たちの地域にも人権フェスティバルがあり、かつて被差別の立場だった地域に多くの人が出向き、ともに過ごしていく中で人権文化を発信している。このような、出会いのある同和問題学習をしていくことで、インターネット上のさまざまな人権問題などの差別をなくしていく子どもたち、地域の広がりができていく。

—報告2—①

狭山現地調査から学んだこと (熊本県人教)

—主な質疑と意見—

神奈川 家族の差別意識に触れてどう思ったのか。また、であい直しをしていく中で、その後家族と話をしたのか。

報告者 親自身も他の地域の出身で部落差別をよく知らなかった。数年前にも周りから聞かされたことを鵜呑みにして話していて、一度話をしようと思って、このレポートの内容も伝えた。父とは話せたが、母とはまだ話ができている。

徳島 狭山事件を扱うことに対して学校現場にも自主規制のような状況があるように感じている。子ども会での活動をメインにしながら学校でも取り組んでいるが、そのあたりはどうか。

報告者 子どもたちが、解放子ども会の立ち位置

で訴えていくことは並大抵のことではない。地域の力、支部の力を感じている。狭山が伝える教育的課題があると思っている。そのことがわかってさえいれば、狭山の学習をとおして子どもたちは身の周りにある部落差別に気づいていくことができると思っている。

徳島 狭山差別事件を学び、石川さんと出会ったことで地区の子どもが変わっていった。地区のない学校の子どもたちも、当事者と出会い、学ぶことで変わっていく。

福岡 同和教育の原点は狭山事件にあると思って同和教育に携わっている。「5.23 人権集会」で子ども会の子どもたちが発信をしていくことは立場宣言にもなる。子どもたちはいつごろ自分たちの立場を自覚し、どのような思いでそこに立っているのか。

報告者 小中の9年間で子どもたちを育てていく。小学4年生で立場宣言に向け、親子学習の中で差別とどう闘っていくのか、仲間をどうつくっていくのかを話し込み、自分の立ち位置を認識して宣言をする。その立ち上がりを見た地区外の子が、一緒に闘いたいと子ども会に参加するようになる子もいる。

熊本 小学4年生での立場宣言を、親や先輩、地域で支えている。学校、保護者、PTAの活動にも広がって、一緒に学ぶようになっていく。

東京 石川さんの「わたしは逮捕されてよかったと思う」という言葉や自分が出会った地区の方の「部落っていうのは個性でアイデンティティ」という言葉が、水俣の語り部・杉本さんの「水俣はのさりです」と重なる。この杉本さんの「のさり」という言葉をどのようにとらえているのか。

報告者 当時は学びの薄さから表面的に、こういうふうに明るく言ってくれるといいなと思って、飛びついてきたように思う。今は、いろんなくやしい気持ちをかみ殺して言われた言葉だったんだと実感している。なぜそんなふうに見えるようになっていったのかを聞いていけるようにしないといけないと思う。

—報告3—③

どうせぼくなんて…～リョウスケがクラスの一員になるために～

(大阪市人教)

—主な質疑と意見—

東京 リョウスケの背景としての父親、母親との関係はどうだったか。また両親の変わり目はいつか。

報告者 父も幼少期にはリョウスケと同じような様子があったと話しており、リョウスケに手を上げている様子もあった。母に対して近所の母親が関わるようになっていったことや、母親にリョウスケのがんばっている様子をこまめに伝えるようにしたことで、母親のリョウスケへの関わりが変わっていった。そのことでリョウスケ自身も変容していき、父にもリョウスケの話ができるようになっていったと感じている。

大阪 子どもや親を変えようではなく、関わっている人を変えなければいけない。「地域みんなで育てていこう」という地盤もある。学校だけでなく、地域のさまざまな人が関わることを大切にしていた。

福岡 特別支援の視点での関わりが必要だと思っているが、担任の交代などどのようにつないでいるか。

報告者 1年生の間に運動などとおして他の教員とつなげるようにしていった。今でも甘えてくることはあるが、少しずつ落ち着いて過ごせるようになってきている。

愛媛 同和教育で大切にされてきた一番しんどい子を中心にすえることを意識したのか。また、関わりきれた原動力や学校としての体制はどのようなになっているのか？

報告者 リョウスケを中心にすえることで、他の子どもたちがありのままを受け入れられように変容していった。複数の教員で関わる体制があり、それが原動力にもなった。

神奈川 できなかったことができるようになることだけがすごいのではなく、教室のルールが守れなくても、その子にしかできないことがあるのではないか。

報告者 学級が安心して過ごせる場になっていく中で、他の子どもに対して優しく関わる場面が多くあった。

東京 「すてきな1年生」の「すてき」というのは、「できないことができるようになる」ことなのか。

報告者 集団として、その子自身の良さを認められること、できること・苦手なことも含めてお互いのことを知り、相手を認められること、それがすてきな集団、仲間づくりだと思っている。

三重 父親は本当に変わったのか。父親も自身の父親との間で、できないことを認めてもらえずに育っており、今はリョウスケの「できるようになったこと」を認めることでつながれているのではないか。本当は、できないことも丸ごと受け入れてほしかったのではないかと感じた。

—報告4—④

部落を大切なこととして生きてほしい

(新潟県同教)

—主な質疑と意見—

福岡 どのような立場でAに関わっているのか。この時をAに伝えるタイミングだと考えたのはなぜか。また、報告者がAに部落出身と伝えているが、支部や保護者との関わりはどうなっているのか。

報告者 児童生徒支援加配教員として関わっている。出会ってきた子のほとんどは支部の子ではなかったり、運動体のない地域の子だったりした。その中で、出会った地区の支部長には、ずっと相談をしている。親から話をしてもらおうとするが、親自身もよくわかっておらず話をしてくれと言われる。いろいろ考えたが、差別の中で生きてきた姿を伝えようと思うようになった。

熊本 報告者の原点はどのようなことがあったか。

報告者 一度目の中学校勤務で人権・同和教育部の担当になり、教育集会所での識字学級や地区の支部長さんと出会った。その後も部落の子を含むさまざまな背景の子どもたちとの出会いの中で、自分の中できちんと付き合いたいと思うようになった。

熊本 Aが部落出身の立場を伝えた友人は「知ってくれている友だち」から「一緒に闘ってくれる友だち」になっているか。また、報告者が出会った部落の子の親たちは祖父母と向き合っているのか。

報告者 その友人とはまだこれからだと思っている。Aには今、自分が出会ってきた部落の子と出会わせたいと思っているが、まだできていない。

また、祖父母からは「差別の話」を聞きに行くのではなく、「どう生きてきたのか」を聞きに行くようになって、いろいろ話を聞けるようになった。関わっている子やその母親もそうやって祖母の話を書くことができている。ただ、親たちは祖父母に差別の話をすることをやめるように言われる。Aを含む子どもたちとはつながれているので、子どもたちをとおして親と祖父母をつないでいきたい。

三重 部落の子が部落外の子に自分の立場を伝える時に、立場を伝えたあとで、それ以上何を語ることができるかと迷うと思う。Aが報告者との話の中でも、自分の親や祖母の思いを語ることができるようになってきているか。そのために、A以外の部落の子にどんなふうに迫れているか。

報告者 今まで出会ってきた部落の子同士をつなげようとしてきた。その中で子どもたちから出てくるのが「部落って何」ということ。Aも「自分と部落差別との関係」を知りたいと思っていて、一緒に問い続けている。新潟では学校の中での部落についての取組はほとんどなく、個々に子どもとつながっている状況だが、今、校内で一緒に部落の子と関われる仲間ができて心強く感じている。

—総括討論—

参加者から、自身や親の生活や生き立ち、ルーツを見つめ、語り合うことの大切さ、しんどい立場の子どもたちとその子どもたちのカミングアウトを自分の生活と重ね合わせて受け止める仲間とのつながりを深めること、つまり、将来にわたって支え合える人間関係の構築の必要性や居場所づくりの大切さが語られた。また、仲間づくりは子ども同士だけではなく、教職員集団、保護者、地域、すべての人々がつながることが大切であると出会った子どもたちの姿で語られた。さらに、私たち自身が、子どもや保護者に向き合う中で、自分の中にある部落認識、人権認識を厳しく問い直していくことの大切さが指摘された。

まとめ

2日間の議論の中で、3つのことが確認された。まず、私たちの立ち位置・自分自身の変わり目について。子どもたちを見つめ、生活背景にアンテナをはっておくことが大切。差別が見え隠れする

中で、当事者が何を感じているのか知ろうとすること、その思いを受けとめる姿勢が大切。差別の現実を知ったところから、自分がどう差別と向き合い、取り組んでいくかが問われる。どの実践にも決心や覚悟、そして、喜びや悔しさ・悲しさがある。また、実践の中でたくさんの出会いがあるからこそ、心の揺れ動きが起こる。その心の揺れ動きを修正してくれるのは、出会った人たち。だからこそ、子どもたちや保護者に正面から向き合うことが大切。私たちはそこから学び、自己を変革していくことができる。

次に、自分を表現すること・語ることでつながる仲間づくりについて。学級会、全校集会、学習発表会、子ども会、学習会、部落研、高校生交流会などで、自分を見つめ、語ることで、お互いを認め合いつながり合うことができる。そうする中で、言いにくいことや言いたくないことが、実は自分の一番分かってほしいことだと気づいていく。そうした子ども同士が、自分の生い立ちや家族のことなどを語る関係性を築く営みこそが差別をなくすことにつながっていく。そのために、まず私たちが自身の生い立ちや差別性と向き合い、自分を解放することができ、私たちのまなざしに変容し、子ども同士をつなぐ「しかけ」から、その子や周りの子の変容へとつながっていく。最後に、差別をなくす主体者、自分事としての人権教育・同和教育について。さまざまな人権問題を「遠いところのこと」「昔のこと」ととらえさせないためには、人権問題に、自分を重ね、自身の差別性と向き合うことや社会と自分との接点を見出していくことが重要になる。そのためには、自分自身が同和教育と出会い直し、身近な人や家族と対話し、差別をなくす主体者となって行動することの大切さが問われる。

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、どのように保障しているか

②分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、子どもの変容、教職員の変容、地域の変容、これからの展望について4本の報告を軸に話し合った。また、2日間を通して「差別をなくす当事者として何ができるのか」、「自分にとっての自主活動は何か」というテーマで討議、交流を進めた。

II. 報告および質疑討論の概要

—報告1—⑦

差別を許さない人に～保護者とともにとりくんだ学習～
(大阪府人連)

—主な質疑と応答—

大阪 地域学習をした次の日のクラスの子の反応はどんなものだったのか。

報告者 「差別がなくなればいい」という他人事の感想ではなく、「差別をなくしていきたい」という自分のこととして捉えた感想が多かった。

和歌山 人権サークルの活動を通してA、Bはつながっていったのか。

報告者 普段から一緒にいるということはないが、同じ地域の仲間という実感をもっている。地域の活動には2人とも積極的にかかわっている

愛媛 立場宣言をしたときに、どのようにして言える環境をつくっていったのか。

報告者 自分の思いを書かせたり語ったりする学習をずっと行ってきた。そのような学習の中で仲間ができて、ここならば言えるという安心感があつたのではないかと思う。Aは言った後は安堵の表情だった。

大阪 地域学習が行われているが、これまでどのような学習の積み重ねがあつたのか。

三重 小学校とどのような連携をしているのか。
報告者 中学校では、1年地域学習、2年仕事体験、3年平和学習という流れで行っている。小学校も6年間で系統立てた学習を行っている。

奈良 人権サークルは生徒の中ではどんな存在なのか。

報告者 地区のことだけではなく地区外の子も参加している。集会では自分の思いを語ったりする活動を継続して行う場となっている。

大阪 この取組をやろうと思ったきっかけは何か。

報告者 最初は先輩がモデルを示してくれた。最

初はわけも分からずがむしゃらにやっていた。活動する中で自分自身もたくさんのことを学び、子どもたちの変容に出会い、この活動を続けていきたいと思うようになった。

兵庫 子どもたちが語ったり、人と出会ったりすることはとても大きなこと。だからこそ、大人も人や地域との出会いを避けてはいけないと思う。

—報告2—⑥

さいごまでこの部落におりたい～差別と災害と、それと闘う私たち～ (愛媛県人教)

—主な質疑と意見—

香川 人権委員会はどんな活動をしているのか。

報告者 学校の委員会活動。人権学習や良いところみつけの活動、人権の花などの活動を行っている。

大阪 ビデオメッセージをつくるなかでの子どもの変容はどんなものがあったか。

報告者 人権について学び、地域の人の思いを受けて、自分たちにできることはなんだろうか、と考えて動くようになった。

三重 被災者への聞き取り活動は自主的な動きなのか。

報告者 1作目をつくった時に、当事者の思いを伝えていきたいという声子どもたちの中から出た。人とのつながりがあることで差別も災害も乗り越えていけるという思いを伝えようと思った。

大阪 子どもたちが推進法を学び、自主的に啓発や教育を担っていく取組が非常に興味深い。災害と差別を結び付けるような調査を行ったのか。

愛媛 災害によって差別があってはいけないと思い、そのことを行政の方が気にしながら復興に臨んだ。災害によって部落差別があったということは確認できていない。

徳島 「つながる」という言葉がキーワードになっているが、自主活動は「反差別の集団づくり」だから、ただ「つながる」ことを目的にしてはいけない。個々を認め合うことができるような関係づくりが大切なのではないか。

—報告3—⑧

「自分を語ること」と向き合う中で～生徒たちとの出会いから～ (三重県人教)

—主な質疑と応答—

三重 出身だから努力しないといけないと言われてどう思う思いをもったのか。

報告者 小学生の時に出身を自覚した。親からも差別されないように努力しろと言われてきた。でもなんで差別されるほうが努力しなきゃいけないのかと思って努力することがばからしくなった時期もある。

大阪 子どもたちをつなげていくことを実践しているが、なぜつなげようと思ったのか。

報告者 教員になってから当時かかわってくれていた人たちの思いに触れた。自分のために頑張

ってくれていた人がいることを知った。だからこそ、子どもたちのお互いの思いを聞いて、どう思うのか一緒に考える仲間になってほしいと思っている。

兵庫 学校の中に生徒を支える部落研のようなものはあるのか。

報告者 学校の中に人権について考えるサークルがあるわけではない。今は自分が気になった子を友の会に誘って仲間とつなげている。学校にはもちろん人権教育推進担当がいるし、何かあった時には人権を守る仕組みもある。

三重 教師に不信感を持っていたCは学校の先生とどんなつながりがあるのか。

報告者 懇談会の中でCの思いをCの学校の先生が聞く機会があった。その先生は丁寧に真剣に思いを返してくれた。少しずつつながりが生まれてきているのではないかと思う。

和歌山 当事者同士のつながりをどうつくっているのか。

報告者 部落問題については勉強してきたが、セクシュアリティの問題についてはほとんど知らない自分がいた。だからこそ、自分も勉強していかないとけないと思う。その学びの中で、Bも一緒に連れて行って当事者と出会っていくこともあった。

—報告4—⑤

「こんな差別があるのって、おかしいと思うんだよね」 (鹿児島県同教)

—主な質疑と意見—

大阪 部落差別について地域ではどれくらい学んでいるのか。

報告者 地域の人から「人権教育担当によって学びが違う」という声もあり、学習についてはまだまだこれから組織していかなければならない。

三重 大人の学習会はこれからどのように継続していくのか。

報告者 地域の中でも温度差があり、2回目以降の学習会はこれから考えていかなければならないと思っている。

東京 夏美さんはどんな思いで「差別があるのっておかしい」という発言をしたのか。

報告者 高校友の会で青年たちと話したことが影響していると思うが、その時の思いを詳しく聞きとれていないのでまた聞いてみようと思う。

奈良 先生が子どもや地域とつながりを感じた瞬間はありますか。

報告者 はるきさんの父親から「お願いします」と言われたり、夏美さんが「差別はおかしい」と言ってくれた時につながりを感じた。

愛媛 公民館は地域の中でどのような学習を行っているのか。

報告者 Z地区では館長が利用者に必ず人権の話をしている。他の地区については確認が必要。

Ⅲ. 総括討論およびまとめ

徳島 人権教育とは権利について学ぶことだと思う。差別は権利の侵害。だからいけない。人権教育の中の自主活動とは反差別の活動だと思う。

愛媛 なぜ差別があるのか、どう乗り越えるのか、それを学ぶ場が学習会。いろんな人と連携して社会を変えていく力にしてほしい。

三重 子どもたちの抱えさせられている現状をきちんと聞きとってほしい。子どもたちにどう育ててほしいかを考えながらやっていきたい。

兵庫 当事者が声を上げないとやらないような取組ではだめだと思う。動いてほしいし、続けて行ってほしい。

三重 いつまで当事者が頑張らないといけないのか。当事者から色々な思いを語ってもらったときにそれを受けとめる人間がもっとしっかり考えてほしい。いろんな思いを受けとめた上でそれぞれの教室で、地域で還元して行ってほしい。

三重 教員の仕事は子どもの学びをどう次につなげるかコーディネートすることだと思う。

鹿児島 出会いがとても大切だと思う。自分の中にあるものを掘り出して、次に向かっていく力になっていく。

報告者 今回の報告でみなさんと出会って、自分自身が変わっていったと思う。この学びを目の前の子どもたちに返していきたい。

報告者 今回の報告で自分が今まで先輩方の積み上げてきた流れの中にいることをすごく感じた。今までの方たちがつくってこられたつながりのおかげで新しいつながりが生まれた。だからこそ、次はそれを自分が次の世代に返していきたい。

Ⅳ. おわりに

報告には、実践者と子どもたち、保護者、地域などとの「確かな出会い」があった。その出会いで「人と人との確かなつながり」が築かれ、心が揺れ、情熱が生まれていた。「つながり」の中で、「人間が変革」していく姿があった。各地域での取組や推進体制などには違いはあったが、どの取組にも差別をなくすためには「かかわり続ける必要がある」ということを確認することができた。今大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、「差別をなくす当事者」として何ができるかを考え、次の実践につなげていきたい。